

志賀直哉「佐々木の場合」と夏目漱石『行人』

吉川 仁子

志賀と漱石

志賀直哉の「佐々木の場合」〔『黒潮』大正六年六月〕は、表題の次の行に「亡き夏目先生に捧ぐ」という献辞を記した形で発表されている。

志賀は、この作品の発表された大正六年に先立つ約三年間、作品を発表していない。武者小路実篤を通して漱石から朝日新聞の連載を依頼された志賀は、大正二年末に承諾の返事をしたもの書きあぐね、大正三年七月に執筆を断っている。以降三年間にわたる作品発表の空白には、執筆を辞退した一連の出来事が一因として関わっていることは本人も「続創作余談」（昭和一三年六月）で述べており（後掲）、よく知られていることであるが、その経緯を改めて確認しておく。

漱石は、志賀の処女作品集『留女』について次のように述べている。

志賀直哉氏の『留女』を読み感心致して、其時は作物が旨いと思ふ念より作者がえらいといふ気が多分に起り候。斯ういふ気持は作物に対してあまり起らぬものに候故わざ／＼御質問に応じ申候。（『書籍と風景と色と？』『時事新報』大正二年七月七日）

右のような高評価が原稿依頼につながったものだろう。志賀は、この記事が出た日の日記に「夏目さんが」「『留女』をほめた」と書きつけている。志賀にとって漱石がどのような存在であったか、志賀の漱石についての言及を拾ってみると、「夏目先生のものには先生の「我」或ひは

「道念」といふやうなものが氣持よく滲み出してゐる。それが読む者を惹きつける」（『漱石全集』推薦）昭和三年三月から刊行の普及版『漱石全集』の内容見本に発表）、「夏目漱石は最も愛読した作家で、「猫」でも、「坊つちやん」でも、「野分」でも、「草枕」でも、みんな繰返へして讀んだ」（『愛読書回顧』昭和二年一月『向日葵』）、「敬意を持つてゐたのは夏目漱石位のもので」（『細川書店版「網走まで」あとがき』昭和二年七月）、「夏目さんの影響は」「文学の上の影響とは云へないものだ。夏目さんの作に現はれてゐる一種のモラルからくるもので、寧ろ実生活の方に影響を受けたと云つていいかもしれない」（『稲村雑談』『作品』一一三 昭和二年八月、十一月、昭和二年三月）、「自分より前の人で好きな人は、夏目さんなんか好きだった。作品ばかりでなく、人間的にも尊敬を持ってゐた。「白樺」の者は大体そうだった」（『大洞台にて』『読売ウイークリー』昭和二年九月）など、漱石に敬意を持つてゐたことが繰り返して述べられている。

その漱石から依頼され、志賀が大正二年末に執筆を引き受けた連載は、漱石の「心」（東京・大阪両『朝日新聞』大正三年四月二〇日―八月一日・大阪は八月一七日ま

で）の次に掲載される予定であつたが、大正三年七月半ばに当時滞在していた松江から上京して執筆を断つてゐる。「心」の連載も終盤に近づいた時期での執筆辞退の申し出に、漱石も困惑したことが朝日新聞の山本笑月と交わした当時の書簡から窺える。

志賀直哉君（当時雲州松江に仮寓小説の件をかねて上京）見え、実は引き受けた小説の材料が引き受けた時と違つた気分になつてもとの通りの意気込で書けな³な³た³た³から甚だ勝手だがゆるして貰ひたいといふのです。段々事情を聞いて見ると先生の人生観といふやうなものが其後変化したため其問題を取り扱ふ態度が何うしてもうまく行かなくなつたのです、違約は勿論不都（合）ですが、同君の名声のため朝日のためにも氣の入らない変なものを書く位なら約束を履行しない方が双方の便宜とも思ひましたが、多少私の責任もありますし、又残念といふ好意もあつたので再考を煩はしたのです、所が今朝口約の通り返事がきて好意は感謝するが今の峠を越さなければ筆を執る訳に行かないといふのです。それで私の小説も短篇が意外の長篇にな

つてあれ丈でもう御免を蒙る間際になつてゐる際ですからあとを至急さがす必要があるのですが御心当りはありますまいか。(後略)

(大正三年七月一三日付 朝日新聞 山本笑月宛「編輯用急」)

次の執筆者を至急探さねばならないという状況に迫られながらも、漱石は志賀に対しては次のように書き送っている。

御書拝見どうしても書けな(「い」との仰せ残念ですが已むを得ない事と思ひます社の方へはさう云つてやりました、あとは極りませんが何うかなるでせう御心配には及びません、他(「日」)あなたの得意なものが出來たら其代り外へやらすに此方へ下さい(大正三年七月一三日付 志賀直哉宛)

漱石は、別の書簡で「志賀の断り方は道徳上不都合で小生も全く面喰ひましたが芸術上の立場からいふと至極尤もです。今迄愛した女が急に厭になつたのを強ひて愛したふ

りで交際をしると傍からいふのは少々残酷にも思はれます」(大正三年七月一五日付 山本笑月宛)とも書いており、「芸術上の立場」を理解し、志賀の違約に寛大であった。また、漱石の志賀への高い評価は執筆辞退後も変わることはなかった。

志賀直哉氏の『范の犯罪』は他の人には書けぬものである。先頃東京朝日に小説を頼んだ時、五十回ばかり書いてよこして呉れたが、自分はどうしても主観と客観の間に立つて迷つて居るどちらかに突き抜けなければ書けなくなつたと云つて、止めて了つた。

徳義上は別として、芸術上には忠実である。自信のある作物でなければ公にしないと云ふ信念がある為であらう。「文壇のこのごろ」『大阪朝日新聞』大正四年一〇月一日)

漱石は「文展と芸術」(『東京朝日新聞』大正元年一〇月一五日—二八日)の中で、「芸術は自己の表現に始つて、自己の表現に終るものである」「芸術の最初最終の目的は他人とは没交渉であるといふ意味である」と述べ、芸術

家が他人の評価を気にするのは不純であり、それを気にしたとき「忽ち己れを失却」し「空虚な芸術」となると述べている。自己を貫いてこそ芸術家であるが、そのためには、時に孤独に耐えなければならぬことを切実に感じていた漱石⁽²⁾にとって、違約することになっても自己の信念を貫こうとする志賀は、まさに「芸術上には忠実」として評価しうるものだったのである。

志賀は連載執筆を断ったことについて次のように述べている。

義理堅い夏目さんにそんな事で迷惑をかけたのは大変濟まない事を感じ、何時かいい物を書いて、朝日新聞に出さうと思つたのが、他にも理由はあつたが、それから四年程⁽³⁾何も作品を発表出来なかつた原因の一つであつた。その四年間にも私は未完成の長篇を時々書続けようとし、それが出来るまでは別の短篇を書いても他の雑誌へ出す事は遠慮しようと思つてゐたのだ。ところが其間に夏目さんは亡くなられた。新聞社からの直接交渉は一度もなかつたので、夏目さんが亡くなられた事で、私の此気持は自然解放されたが、その後初

めて発表した「佐々木の場合」といふ小説を亡き夏目先生にデディケートして僅かに自分の止むを得なかつた不義理を謝した。(「続創作余談」昭和一三年六月)

尊敬する漱石の依頼を、迷惑をかける形で断ってしまった「不義理」を謝すために、長い空白後に初めて発表した作品をデディケートしたというのは、納得のいく話である。しかし、空白期間ののち、「初めて発表した」のは、「佐々木の場合」より一か月早く発表された「城の崎にて」(『白樺』第八卷五号 大正六年五月)である。本多秋五(『志賀直哉』上 一九九〇年一月 岩波新書(新赤版)一〇七)は、この二作の執筆時期は同じ大正六年四月であるのに、志賀がこの二作を並べる時に必ず「佐々木の場合」の方を先に挙げることに触れ、志賀が「佐々木の場合」を漱石に献呈したのは、「佐々木の場合」の方を「より創作らしい創作、業績らしい業績と考えていた」からで、掲載誌が「内輪の雑誌「白樺」ではなく、「公共的な意味をもつ総合雑誌「黒潮」であつたこと」もその裏付けであるとして見ている。下岡友加は、この作品が漱石に献じられた理由を問い、本多の説を「本質的な理由ではない」とし、内容

の面から「小説執筆の約束を交わした漱石と志賀の関係を反映したものとして読むことが可能」と述べている。本稿でも、この作品が漱石になぜ献呈されたのか、漱石と志賀のかかわりに注目して掘り下げてみたい。

「佐々木の場合」

「佐々木の場合」は、「僕」（佐々木）が自らの恋愛話を

友人である「君」に語り、「僕」の語りの後に、聞き手であった「君」が「自分」という一人称で感想を述べるという形式をとっている。内容をごく簡単に言うなら、過去に結婚の約束を破った男が、時を経て女と再会し、関係の修復をはかろうとする物語である。話の梗概については、表の「佐々木の場合」の欄をご参照いただきたい。

		「佐々木の場合」	
語り	「僕」（佐々木）が同郷の後輩らしき「君」（のちに「自分」として登場）に対して語り、最後に、それについての感想を「自分」が語る。	女景清の逸話（夏目漱石『行人』）	一郎・二郎の父が、謡の客、一郎、二郎、一郎の妻・お直の前で「逸話」を語った場面を、二郎が語る。
結婚の約束	佐々木は山田の家に書生をして士官学校の入学準備をしている時に、山田のお嬢さんの守っ児である富という娘と関係を持った。佐々木が十九才、富が十六歳の頃である。人目を忍んで物置で逢引をしていたが、佐々木は二人の関係はいたずらな関係ではなく、自分が少尉が中尉になれば必ず正式に結婚すると富に言って聞かした。	二十五年前、父の知り合いのある男が二十前後の時、その男とその家の召使が関係を持ち、男は女を妻にすると明言した。	
破約の経緯	ある日、大工の焚火の残り火の傍にいた佐々木のころへ富がお嬢さん連れれてきた。二人が逢引をしている隙にお嬢さんが焚火に転げ落ちて大やけどを負い、傷の治療に移植が必要となった。自責の念にかられた富は、お嬢さんに自分の尻の肉を提供すると申し出た。佐々木は、自分が名乗り出るべきだと思いつつも、士官学校の体格検査に不利になることを恐れて言い出せず、富が治療に協力するため入院している間に山田の家を逃げ出す。富に対する責任は果たすと言ってから出たかったが叶わなかった。	しかし、それは、坊ちゃんだったその男の勢いに駆られた言葉であって、一週間経つか経たないうちに後悔し始めて破約を申し込んだ。女はすぐ暇を取って出ていき、男は二三ヶ月の間考え込んでいた。一度女が家に寄ったときも、口もほとんど聞かなかった。	

再会	女の 子
<p>その後、佐々木は大尉の時大使館付きになってロシアに七八年いて、つい最近日本に帰って来た。この間、富のことは忘れはせず、結婚もみんな断っていた。つい一週間前、偶然銀座でお嬢さんを連れた富を見かけた。富は、昔と違って大きな女になっていたが安心の状態に居る人らしい落ちつきが見えた。</p>	<p>今更に新しい感情の湧き起るのを感じた佐々木は、山田に電話をかけ、「十六年前にお別れした佐々木です」と名乗り、会って話したいと伝えたが、富は姿を現さなかった。富から手紙が来て、「自分は今は厄のやうな氣持である。お嬢様は未だ御縁がなく淋しい御心で居られる時に何事がなくても貴方とお会ひするやうな事は心ががめる」と、手紙ならということで、女名前の封筒を二枚送ってきた。富は、佐々木とこのことを心の底から悔やみ、自分はもう如何な事があつても男との關係は作らない、それは、主人の家のみんなに誓っており、生涯困らないようにしてもらつておいてからさういうことをしてかすのは許されない、それに自分は不幸ではない。佐々木が逃げた時は薄情男だと思つて怨んだが、別れてからのことを手紙で知つて大変ありがたく思い、「私はそれで満足しました」「どうか自分のことは忘れて早くいい奥様を御貰ひになつて楽しい家庭を作つて頂く、それが却つて自分の慰めである」という返事が来た。お嬢さんが縁付いたらどうなのだと言つて遣つたが、それきり返事は来ない。</p>
<p>その後、男は、学校を出て家庭を持ち、二十何年たった最近、偶然にも有楽座でその女と再会した。しかし、女はその時盲目になっていた。</p>	<p>男は女が盲目になっていることを気にして、何とか彼女の居所を突き止めて、二郎の父に、その女の所を訪問して呉れと頼む。男は妻子の手前自分では出かける理由がなく、また、学問のため三五六にならなければ妻帯しないという理由で別れたのに、学校を出てすぐ結婚しているので良心の呵責もあるからだつた。父が女を訪問し、男の名を打ち明け、菓子折りや金の包を渡すと、女は、今は寡婦だが堅平とした夫があり、子供もいるので、他人さまから金子をいただいで、夫の位牌に対して済まないと言つて受け取らない。その氣込が、父に謡曲に登場する景清を思い起こさせた。父が女の見識に話の腰を折られて席を立つとすると、女が、男の現在の様子を尋ね、子どもの年を聞いて、指を折つて勘定して淋しく笑つた。そして、「一生の御願ひ」として、「結婚の約束をしながら一週間経つか経たないのに、それを取り消す氣になつたのは、周囲の事情から圧迫を受けて已を得ず断つたのか、或は別に何か氣に入らない所でも出来て、其氣に入らない所を、結婚の約束後見付けたため断つたのか、其有体の本當が聞きたい」と言う。「ただ両方の眼が満足に開いていくせに、他の料簡方が解らないのが一番苦しい御座います」と言つた。</p>

<p>佐々木は、以上のような話を、同郷の後輩らしい「自分」に語って聞かせた。「自分」は、佐々木が富の道義心や犠牲心を低く見ている点について、「佐々木も可哀想だが」「同情出来な」と思い、女が「信じた事を固く握り締めて居るその強さ」にいい感じを抱く。また、佐々木の妻になることが必ずしもその女の幸福を増すことになるとは思わず、「佐々木には女の今持つてゐる幸福が如何なものかは本統に解つて居ないと云ふ気がする」とも思う。「佐々木はイゴイストである。然し決して不愉快なイゴイストではない。自分のした事に責任を負おうとし、心からの愛を注ごうとしているが、女が承知しない以上、仕方がない。「自分」は「何と云つていいか分からなかった」。</p>	<p>父は、「本人に軽薄なところは些ともない」と答え、適当に「まかしたことを得意気に語り、客たちもそれを「好い功德」をしたと言つて褒めた。後日、一郎は、女が何年も煩悶していたことを「まかした父を「軽薄」とし、二郎も父の子だけあって「軽薄児」だと非難する。</p>
---	---

ように述べている。

新聞の三面記事から思ひついた。新聞には書生は逃げて了ひ、女中は自分の肉を提供した、これだけが書いてあつた。私は逃げた書生にも言訳の根拠はあるかも知れないと思つた。それが、書く動機となつた。此小説は丸四年間何にも出さずゐるで、武者小路に勧められ、久しぶりでその頃あつた「黒潮」といふ雑誌に出したものである。これが又書き出す機縁となつた。

古川裕佳（女中は軍人と結婚すべきか―「佐々木の場合」）『志賀直哉の（家庭）―女中・不良・主婦』二〇一

一年二月 森話社）は、右の「新聞の三面記事」にあたるものとして、大工の焚火に少女が転げて大火傷を負つたという一九〇〇（明治三三）年二月二十六日の『日出国新聞』掲載の記事を該当するものとして挙げ、志賀の自宅近所⁽⁵⁾で起きた事件なので、この記事がモデルの一つになりうると指摘している。また、「佐々木の場合」には、作品の前身と言える「坂井と女」という大正二年六月に書かれた草稿がある。「坂井と女」は、坂井という彫刻家がかつて自分に惚れていた女に電車の中で再会し、その女と結婚しようとするという展開を持つが、坂井が、女にまつわる過去を友達である「自分」に話し出すところで終わっている。女は、火傷跡のある女兒を連れた三十位の大柄な女と

されており、その形象は富と重なっている。お嬢さんの火傷がやはり関わっているらしい点から、内容的に「佐々木の場合」と同様の展開が想定されていたものと推察する。古川は、「坂井と女」の執筆直前に、新聞のゴシップ記事で「大津順吉」（『中央公論』大正元年九月）で描かれた志賀と女中Cとの関係が「若様と小間使の恋仲」などと揶揄的に「取りざたされたことを指摘し、「坂井と女」はその応答として書かれたという面もあるのかもしれない」と述べている。「坂井と女」における離別、「佐々木の場合」の結婚の約束の破約という点は、確かに「大津順吉」に描かれていた志賀と女中Cとの恋愛事件を想起させる。破約の修復を図ろうとする主人公の姿に、結婚の約束が果たせなかったことには理由があるのだという弁解を読み取ることが可能だろう。しかし、「佐々木の場合」には、富の現在の幸福を低く見積もって、関係を修復しようとする佐々木について「佐々木も可哀そうだが、自分には少し同情出来なかつた」と述べる「自分」という聞き手が登場している。先行研究も指摘するように、佐々木を相対化する「自分」の存在は重要である。このような「佐々木の場合」のストーリー展開と、聞き手の存在による相対化という構造

を見ると、漱石作品の中に共通する要素を持つものとして想起されるテクストがある。竹盛天雄（父と子の形―志賀直哉について―）『介山・直哉・龍之介 一九一〇年代 孤心と交響』昭和六十三年七月 明治書院）は、「佐々木の場合」について、「わたくしはこの作品のテーマが自己主張・欲求と「安心」との関係を追究しているというように読む。そのとき、「安心」をモチーフとしつつエゴイズムの剔抉にむかった漱石の世界が、この作品のむこうに隠顕しているように思われてならない。逃げ出した男の昔の心理と現在の心境を確認した女の述懐などは、『行人』の「帰つてから」に出てくる〈盲目の女の挿話〉のヴァリエーションを感じさせるほどである」と述べている。竹盛がここで述べている〈盲目の女の挿話〉は、『行人』の中で「女景清の逸話」と呼ばれているものだが、竹盛が言うように、この挿話は、「佐々木の場合」と非常に似ているテクストなのである。二つの話を比較し、類似点ももう少し具体的に考えてみたいと思う。表を参照していただきたい。この表は、ストーリー展開と物語内容の比較に重きを置いて、筆者がまとめたものであることをお断りしておく。

『行人』と「佐々木の場合」

二つを比べると、結婚の約束をしたのち破約すること、年を経て女と偶然再会すること、女のほうが昔と比べてずいぶん変化していること、その女に対してアプローチをすること、というおおまかなストーリー展開が共通していることがわかる。「佐々木の場合」では、破約の当事者である佐々木本人が出来事を語るのに対して、『行人』では、破約をした人物の話を第三者である、二郎の父が語るという形になっているが、聞き手を持つという構造も共通する。

ここで『行人』について簡単な説明をしておく。『行人』は、大正元年十二月六日から大正二年十一月十五日まで東京・大阪両『朝日新聞』に連載された。四章（「友達」「冗」「帰つてから」「塵労」）からなり、三章の後、大正二年四月八日から大正二年九月十七日まで作者の病気によって休載となる。当初、三章の残りを書き足して完成させる予定だったことが書簡等から窺えるが、連載が再開され四章構成となった。⁽⁸⁾長野一郎は、長野家の長男で、学者で見識家だが、神経鋭敏・潔癖な性格で、さらに、長男だけにわがままで気難しい面もあり、周囲の人間が気を遣う存在

である。一郎は妻のお直の心がつかめないことに苦しみ、弟の二郎に「お直は御前に惚てるんぢやないか」と疑いをかけ、旅先の和歌山で二郎にお直の節操を試してもらいたいという依頼をする。二郎は難色を示すが、一郎に迫られて、お直と日帰りの予定で出掛けるが嵐のために思いがけず一泊することになる。何事もなかったものの、「壮烈な最期を望む」という発言など、その夜のお直の言動はどう解釈してよいのか二郎を悩ませるものだった。しかし、一郎には「姉さんの人格に就て、御疑ひになる所は丸でありません」と言い切つて、詳しい報告は先に延ばしたままであった。旅から帰京後、一郎はだんだん孤独を深めていくが、そんな折、父の謡の席に、一郎夫婦と二郎も呼ばれ、「景清」の謡を聞かされた後、父から「女景清の逸話」（以下「逸話」と略す）を聞くのである。お直の心を知りたいと願う一郎は、女の積年の願いをごまかした父を、虚偽を行く軽薄な存在と見なし、お直についての報告をしないままの二郎も同様だと非難する。以降、一郎はますます孤独に沈み、作品の最後には、一郎と一緒に旅に出た友人日さんからの手紙によって、一郎の苦悩が報告されるのである。四章の途中までは二郎の語りで進み、四章後半は書簡

形式で日さんの語りとなる。

志賀の日記の大正二年九月二七日の項には、「行人」の続きを少し読むで見た。夏目さんのものとして、物と思ふ。漾つてゐる或気分に合はぬものがあるが、筆つきのリツチな点は迎も及ばぬ」という記述がある。ここから、志賀が、休載後再開された『行人』の四章を読んでいるのは確かのようにだが、「女景清の逸話」は三章に置かれた挿話である。また、「佐々木の場合」の前身である「坂井と女」の執筆は、大正二年六月で、『行人』の三章の後の休載中ということになる。「佐々木の場合」の成立に「女景清の逸話」が直接影響したかどうかは、時間的な関係からは可能性は全くないわけではないがはっきり断定はできない。もし、影響を受けたのだとしたら、「逸話」のどのような点に志賀は反応したのだろうか。「逸話」では、男が結婚の約束を破ったことよりも、破約の理由を知りたがった女の願いを二郎の父が適当にごまかしたことが焦点となっている。しかし、前述したように、結婚の約束をしながらそれを破るといふエピソードは、志賀にとって、無関心でいられない話題であったといえる。「逸話」における破約した男の形象は、深い思慮なく「無邪気」に結婚の約束を

し、一週間経つか経たないうちに後悔して破約した「可愛らしい坊ちゃん」「本当の坊ちゃん」と、その未熟さが「坊ちゃん」という言葉で強調されている。志賀が、その「坊ちゃん」の描かれ方に、自分もそのように見られているのではないかと、と反発を覚えた可能性は考えられる。決して軽はずみではなく破約に至る場合もあるのだという弁解として、「佐々木の場合」が書かれたということは考えられる。しかし、そうした実体験と結びつけた影響関係よりも、結婚の約束を破った男が女と再会し関係性の修復を試みるという両作に共通の展開が、モラルのさまざまな相を映し出すエピソードとなり得ていることがより重要だろう。約束を破ることは悪、嘘をつくことは悪、破った約束を修復しようとすることは善、というように、一般的には考えられるかもしれない。しかし、実際において、何が善で何が悪かはそれほど簡単な問題ではない。『行人』の「女景清の逸話」は、偽りを憎む一郎と、彼の周囲の人間との懸隔を決定的にするものとして意味づけられるが、それは、一郎の側からの見方である。四章で一郎の苦悩が明かされるが、その苦悩は、具体的なお直との関係についての苦悩から、観念的な苦悩へと移行したものだ。一郎

は「死ぬか、気が違ふか、でなければ宗教に入るか、僕の前途には此三つのものしかない」(『行人』「塵勞」三十九)と述べ、また、絶対の境地を求め、その境地に入れば「絶対即相對」となり、「自分以外に物を置き他を作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる卦念も起らない」(『塵勞』四十四)「生死を超越しなければ」安心は得られないと語る。『行人』は自我を離れることのできない一郎が、それゆえに他者との關係性に苦しむ物語である。「女景清の逸話」において、父が女の願いをごまかしたことは、虚偽として一郎にとっては許されないものであるが、破約の理由を女にありていに伝えることが本当に善かどうか、立場を変えてみるならば、自足していた女の生活を乱さないほうがよいかもしれないのである。この話が座興として話され、客たちは父のしたことをよいことと褒めた。追従も含めて「嘘も方便」に通ずる受け止め方がここにはある。それを許さない一郎の潔癖さは、一郎の正しさを示す一方、一郎の偏りを問うものにもなっている。このように、『行人』は、一郎の絶対化と相對化という問題を描いており、その問題は「佐々木の場合」に通じている。

佐々木は、再会した富に電話をかけて、不愛想な対応を

されたとき、次のように思っている。

何と云ふ事もなく僕は自分が今幸福な身の上だと云ふ気がして居た。勿論世間並な意味でだが。そして富は女として不幸な境遇に居る者として考へて居た。そして僕は自分が富に交渉して行くのは幸福な者が不幸な者を救はうとしてゐるのだと云ふ風に考へて居た。何となくそんな気持で居た。所が今の對話はそれと全く反対な感じを与へた。幸福に暮して居る者に対し昔の關係を楯にそれを攪乱しようとする者のやうに自分が見えた。

さらに、富は手紙で「私は今少しも不幸ではない」と述べ、「御別れしてからの事を御手紙で知つて今は大変ありがたく思つてゐる。それで私は満足しました」と書いている。不幸な富を結婚することで自分が救うという佐々木の思い描く構図については、彼自身もその歪みを感じており、聞き手である「自分」も次のように述べている。

佐々木は今其女の心をさへぎつて居るものは紋切型

な道義心と犠牲心とで、それをとり除く事が出来れば問題は解決すると思つて居るらしい。そして其道義心と犠牲心に余りに価値を認めない点が、佐々木も可哀想だが、自分には少し同情出来なかつた

「自分」は「其女が信じた事を堅く握り締めて居る其強さに」「いい感じを持つた」、そして、富が佐々木の妻になることが必ずしもその女の幸福を増すことになるとは思わず、「佐々木には女の今持つてゐる幸福が如何なものかは本統に解つて居ないと云ふ気がする」とも述べる。「佐々木はイゴイストではある。然し決して不愉快なイゴイストではない。自分のした事に責任を負はうとし」「心からの愛を注がうとしている」が、女が承知しない以上、「それはそれまでと云ふより仕方がなく、「自分」は「何と云つていいか分らなかつた」と作品は結ばれる。「自分」の感想は、結論としては菌切れの悪いものであるが、佐々木の考え方は、佐々木の「場合」という一つの見方であることが、聞き手である「自分」によつて示されていると捉えることができる。

以上のように、「佐々木の場合」と『行人』は、結婚の

約束を破るというエピソードが語られることによつて、当事者・語り手・聞き手のそれぞれのモラルのありようが間われ、相対化されるという共通点を持つてゐる。「主観と客観の間に立つて迷つて」、漱石から依頼された作品執筆を辞退した志賀にとつて、佐々木を相対化することは、その迷いの模索の延長にあつたと考えられる。そして、それは、自己と他者の関係を追求し続けた漱石の問題を引き継ぐことであつた。相対化という点で、「佐々木の場合」と『行人』はつながり、その点で、この作は漱石に捧げられるのにふさわしい作だといえるだろう。

注

- (1) 漱石の書簡（大正二年一月三日付志賀直哉宛）に「武者小路君を通じてご依頼した事につき御承諾の意を御洩し被下まして難有存じます」という文句が見える。
- (2) 大正元年二月四日付津田青楓宛書簡に「私の小説を読んで下さるのは難有いどうか愛想を尽かさずに読んで下さい。私は孤独に安んじたい。然し一人でも味方のある方がまだ愉快です。人間がまだ夫程純乎たる芸術（家）氣質になれないからでしょう」とあり、芸術家の孤独が述べられている。
- (3) 志賀は「四日程」と書いているが、「著作年表」によると、

大正三年四月から大正六年五月まで作品の発表がなく、空白は約三年である。

- (4) 下岡友加は、作品執筆時の志賀の年齢と佐々木の年齢が同じであることに着目し、自分の都合を優先して破約し、自分の感情のまま遅きに失した求婚をした佐々木と、「芸術上の立場」を理由に執筆を辞退し、漱石に義理を果たす時期を逸した志賀が重ねられ、批判されていると指摘している。

- (5) 古川は、少女が大火傷を負った家は麻布区兵衛町で、「志賀が自宅（麻布区三河台町）から一二〇メートルほどの近所で起きた事件を知らなかったとは思われない」と述べている。

- (6) 須藤松雄（『志賀直哉の文学』）は、「佐々木は、ある程度、作者の自画像の要素を含んでいるようであり、富は「大津順吉」の千代にかなり近い」と述べている。

- (7) 例えば、山崎正純（『沈黙する志賀直哉―個と反復』）『敍説』（敍説舎）一九号（一九九九年八月）は、佐々木は「〔富〕を弱者と見る『進歩性』から自由ではな」かったが、「〔自分〕の感想が、「一気に佐々木の立脚点を相対化」することを述べている。

- (8) 『行人』の成立と構想の変化については、拙論「夏目漱石『行人』論―構想の変化について―」（山尾仁子『叙説（奈良女子大学）』第一九号（平成四年二月））で論じた。

- (9) 『行人』における相対化の問題については、注(7)の拙論で

論じた。また、語りに対する聞き手の存在による相対化、「女景清の逸話」の意義については拙論「夏目漱石『行人』論―『女景清の逸話』を中心に―」（『叙説（奈良女子大学）』第四七号（令和二年三月））で論じている。